
魔物の王と剣の勇者

ミズマ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔物の王と剣の勇者

【Nコード】

N2215Z

【作者名】

ミスズ。

【あらすじ】

勇者と魔王のお話です。ラブコメです。
当方のブログより転載。

世界には魔物が溢れている。
魔物の王は全てに君臨し、世界を蹂躪しようとしていた。
世界には勇者が必要だった。

勇者として召喚されたのはまだ歳若い少年だった。
彼は己れの剣ひとつで魔物の群れの中へと斬り込んだ。
魔物の軍の奥深くで彼が見たもの。

それが世界をがらりと変えた。

「こんちわー。べべいる？」

ものすごい軽い声を発したのは金の髪の青年。青空と同じ色の瞳は朝の光を受けてきらきらと輝いている。例えその目が見つめるのが、醜怪な化け物であったとしても。

「姫様ならばいつものところにおる」

岩と岩を擦りつけたような声を絞り出した、悪魔のようにねじくれた角を生やした化け物は、なんとも感情の読み取れない顔。

青年はおもむろに背負った大剣を抜き放った。

それは太陽の差さない霧深い森の中でさえ、太陽の欠片を鍛えたような輝きを放つ。

光の剣と呼ばれるその剣は、魔物の王を討つために古来より世界に伝わるもの。石に突き立てられたそれを引き抜いたのがこの青年、バルカであった。

粉屋の息子であった彼はその一瞬後から、世界を救う勇者となった。

だが、今ではその事情も少し変わっている。

バルカは光の剣を魔物に向けることなく大地へと深々と突き立てた。これでこの剣は、その真の使い手、つまりバルカ以外には抜けなくなる。

それから腰のベルトに挿した大振りなナイフをどさりと大地に落とす。ブーツから刃の細いナイフを一本ずつと、ジャケットの隠しから小さなナイフを何本も。あとはシャツの下に隠した投げナイフをいくつも外していく。

「あ、オレって元々ナイフの方が得意なの」

怪訝そうな目を向けてくる怪物に向かって照れ笑い。

「ってかさ、光の剣って実戦には全然向いてくない？ でかいだけで邪魔なんだよね」

言いながら、小物（煙幕その他色々）が入ったポーチも外して、バルカは完全に武装解除した。

身軽になったバルカは、んー、と大きく伸びをする。

「ああ、軽くなった！ じゃあべんとこ行って来るから」

「……気をつけることだ」

「なに言ってるの」

バルカは笑う。

「剣の勇者に傷を付けられるのは、魔王さまぐらいなもんだよ」

バルカは口笛を吹きながらジャケットのポケットに両手を突っ込んで、プラプラと歩いていった。

深い深い森の中である。常人であれば躊躇うような深い森。だがもう何日、何ヶ月も通い慣れた道。うねうねと這う根に足を取られることも、鬱蒼と繁る葉々に頭を撫でられることもない。

瘴気すら漂っていきそうな森の中でも、ちよつとした散歩のような風情。

上機嫌だ。

途中ですれ違うスライムやゴーレムに軽く挨拶をしながら進むバ

ルカの顔はしまりが無い。にやにやとしたその顔に怪訝な視線が向けられていてもそれを気にとめるようなことはしない。

彼がべべの住処である洞窟へ着いたときにも、その顔には蕩けたような笑みが貼り付いていた。

「べべー！ 元気！？ 今日愛してるよー！」
軽い。

非常に軽い声が暗い洞窟内を通り抜けた。

だがそんな声を迎え撃つたのは、低く低く低い声だった。

「炎よ」

ゴウ、と炎が暗い洞窟内に満ち溢れる。それは収束して、バルカへと迫る。

「わ、わわーッ！」

さっ、と身を隠して炎をどうにかやり過ごす。炎が通った跡を見れば、岩が見事に焦げついている。

「ってか、溶けてるよね、コレ」

真っ赤などろどろになった岩肌。どれだけの熱だったんだろうなあ、と思うバルカの顔にはしかし、微塵も緊張感はない。

「……避けたか」

苦々しく重苦しい呟きが洞窟内に響いた。

それは黒い小さな人影から発せられた。

黒く黒く黒い、闇を押し固めたような黒さ。黒く長い髪は手入れられたことなど一度もないように、汚く縮れていた。

まさしく、魔王の名に相応しい闇。その黒の間から覗く顔だけが白く、そして実に、

「やあ、べべ！ キミは今日もかわいいなあ！」

その少女は、大層かわいい顔をしていた。

「毎度毎度煩わしい。今日こそはおとなしく斃されてもらおうか」
仏頂面だが。

かわいい顔から漏れたとは信じたくない、地獄の底から聞こえるような声には殺意に満ち溢れていた。

だがそれに怯むバルカではない。

「オレはいつだって、ベベの魅力にへろへろだよ」

「物理的に殺してやると言っている」

「そ、そんな！ まっ昼間からそんな卑猥な！」

「凍れ」

ベベは手を払った。大気中の水がみるみる錐の形に凍りつき、いくつもの切っ先がバルカを襲う。

ひらりひらりと身をかわず丸腰のバルカは余裕の笑み。対するベベは元々貼り付いていた苦虫を噛み潰したような顔をますます強くした。

「いい加減に死ね！」

「キミと添い遂げたあとでなら、いくらでも」

「戯言を」

吐き捨てるベベ。

「勇者である貴様が魔王である私に向けるべき言葉とは思えんな」

「そんな簡単な常識になんて囚われてるの？ 魔王さまともあるうものが」

「貴様が非常識なのだ」

「勇者たるもの、非常識なんて誇りを恐れちゃダメでしょ」

「おまえは多少、恐れた方が良い」

「あれ、心配してくれてんの？ いやあ、愛を感じるなあ」

バルカの軽口に、いつもならば辛辣に言葉を返すべべだが、なにやら考えるように口籠った。

「……………なに？」

「貴様ごときを旗印に掲げなければならなかった人間の苦勞が忍ばれるな、と」

「不可抗力だもん。文句はオレを選んだ光の剣に言っつてよ」

「……………」

「今度はなに？」

「貴様ごときを迎え討たねばならぬ私も十分に不幸だ」

「それはそーかも」
「貴様が言うな！」

魔物の住処のそのど真ん中で、魔物の頭領たる魔王を口説く軽薄な勇者。傍から見ればふざけているとしか思えない光景だが、本人は本気であった。

ただし、勇者のみ。

「ねー、ベベー。もうオレのお嫁さんになるーよー」

「寝言は死んでから言え」

魔王はにべもない。

「またまたあ。オレほどベベを理解してるヤツなんてこの世界には誰もいないのにー」

「確かに、人間ではおまえと一番接触が多いのを認めるのはやぶさかではないが。私の理解者は森に住まうものたち以外にはおらん」

「オレだって、半分は森に住んでるようなもんだしー」

「人間に、私を理解するようなものはおらん」

「なに言ってるんのさ」

山をも一刀両断しそうな拒絶にもバル力は晴れ晴れと笑う。

「ベベだって人間じゃないか！」

真正正銘、彼女は人間だ。

魔物に育てられた少女は、魔物に傅かれるもの、つまり魔王となっていた。

魔物の軍は人間に対し侵攻を開始した。そして人間を擁する勇者と戦火の中で対面し……。

「そして運命の出会いを遂げたわけだよね！」

「破滅の運命だがな」

「というわけだから結婚して！」

「……一体どういうつもりだ」

「なにが？」

「かような策を弄して私を欺く気か。残念だがそのような策に嵌る私などではないわ」

うーん、そうくるかー。

「オレは心の底から、キミを愛してるんだけどなあ」

今日も魔王に追い返された勇者は、だが幸せそうな顔をして森の入り口へと帰ってきた。突き立てた光の剣を引き抜き、ぼたぼた落としていたナイフを再び装備する。

鬼気迫る表情の魔王に追い返されたというのに、彼はニコニコと満面の笑顔だ。

「相変わらず奇特な人間だな、おまえは」

ねじくれた角を持つ化け物は律儀にも武器を見張っていたようだった。

「人間の子を育てる魔物の方が奇特だと思っけどなあ」

あはは、と笑う勇者。

「我々は、おまえに感謝すべきなのだろうか」

「なんで？」

「人間の侵攻が止まっている」

「そりゃ、愛しい子の住む場所に土足で踏み込むなんてこと、許せるわけがないしね」

笑う勇者。だが魔物は彼を軽々しく見積もる気にはなれない。

この軽薄な男は魔境と呼ばれるこの辺り一帯を人間の手から取り上げた。

「魔物がいて危ないから、この辺は全部オレが管理するね」

適当で無計画なそんな主張を、人間の各国家元首に飲み込ませた手腕は、豪腕で強引で辛辣ですらあったと聞いている。

魔物が住まうこの場所はいまや、その仇敵である勇者の手によって魔物にとっての楽土となっていた。

「魔境から外に出ちゃだめだよ。討伐される口実は作らないのが一番なんだから」

「心得ている」

「キミたちが最初に人間を襲ったのも、魔王のためだったんだろ？心優しい魔物たちは、人間に捨てられたベベの悲しみを知っていた。だから、人間を襲うことにした。魔物と呼ばれる、知恵を持つ人間以外の生物が人間を襲いだしたのは、今から十年前になる。

彼らは真に「魔物」ではない。

「もしベベが魔王なら、光の剣が教えてくれるはずだし」

光の剣の勇者は、その高い空色の瞳で遠くを見つめた。それは彼に似つかわしくないぐらい、鋭い眼差し。

「魔物も魔王も、別にいる。封じられたやつらが解放のときを待っている」

だから今、この時代に剣の勇者が選び出されたのだ。

「人間だけじゃやつらに抗いきれない。そのときには力を貸してもらいたい。だから、感謝なんてしないでいいよ。オレはオレのためにやってるんだから」

「自分のために世界を救うか」

「正しくは、オレとベベの明るい未来のためだけだねッ！」

ぐっ、と拳を握るバルカ。ため息をつくねじれた角を持つ偽者の魔物。

やっぱり奇特なバカなのだな、この男は。

こんなのに手塩にかけた愛娘を掻っ攫われるかと思うと、なんともやりきれない気分になるのだった。

「あー、それから」

帰りがけに勇者はねじくれた角を持つものに振り向いた。

「なんだ」

「あんた方ってネーミングセンス皆無だよなー」

しみじみと言う。

「なんの話だ？」

「だってベベの名前、『ウケベベ』って。女の子にそれはないよ」

「……偉大な竜の名なのだがな」

「いや、そもそも女の子に竜の名前つけるのはダメでしょ」

「……以後気をつけよう」

「オレとベベの子供はねー、エリザベスとかアンジェリーナとかって名前にするんだー」

「いいからもう帰れ」

勇者と馬鹿は紙一重。かも知

れない。了

(後書き)

当方のブログには、この世界の話の続きがありますよ！ 宣伝です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2215z/>

魔物の王と剣の勇者

2011年12月7日23時54分発行